

『太平洋の奇跡—フォックスと呼ばれた男—』

真田 紀子



1 生きて、
日本に帰ろう—
”生きて日本に
帰ろう”という

映画の宣伝文句を
見て、戦争中にア
メリカ軍に投降す
ることによって部
下の命を救った軍
人がいるというこ
とに興味をもった
こと。また、それ

ならあまりひどい殺戮現場を見なくてすむかな
という思いで映画を観る事にしました。普段は、
戦争映画はできるだけ観ません。

実際に観てみると、自分の思い違いであった
ことに気づきました。戦争中ではないこと、自
分の意思でアメリカ軍に投降したわけではなく、
上官の命令という手続きを踏んでいたことなど、
色々と考えさせられました。

まず、どうしてこの映画が製作されたのか、
『タツポーチョ』敵ながら天晴 大場隊の勇戦
512日』ドン・ジョーンズ著／中村 定訳
祥伝社／一九八二年刊行 現在絶版 祥伝社黄

金文庫で再販(七二〇円)

サイパン島で銃を交えた元ア
メリカ海兵隊員が書いた一冊の
本がきっかけのようです。

ここで映画のあらすじを紹介
しておきます。

2 バンザイ突撃

場所はマリアナ諸島サイパン
島、一九四四年七月七日残存部
隊の約三〇〇〇名によるバンザ
イ突撃敢行のあと、生き残った
大場大尉が逃げ惑う内、同じく
生き残った兵たちと行動を共に
するようになる。彼の階級が最
も高かったため彼が指揮官とし

て行動するようになる。その行動範囲が主にタ
ツポーチョ山の周辺であったようで、かなり大
きな山塊である。当時、民間人も多数この山に
逃げ込んでいて、自給自足の生活をしていたグ
ループもあったようである。そのグループも大
場大尉の率いる兵と行動を共にし、アメリカ軍
の行なう掃討作戦をかくぐつて逃げてしまっ
たため、アメリカ軍を相当怒らせたようである。

映画では、何度も観た事のある場面が使われて
いた。崖の上からモンペをはいた女性が飛び降
りる。子どもを抱いた女性が飛び降りる。それ
にかぶるように、アメリカ兵の”ノー”という
声が聞こえる。この部分は、当時の本物の映像
で、白黒で挿入されている。私は、これは沖繩
の映像だと思っていた。しかし、これはサイパ
ン島のバンザイクリフのものだということを知
初めて知った。

3 アメリカ軍への投降

当時、サイパン島にいた民間人は約二万人と
推定されている。逃げようとしている民間人を
アメリカ軍が機銃掃射している場面も描かれて
いた。しかし結果的には半数以上の民間人がア
メリカ軍に収容されて助かっている。映画では、
その収容所に夜間忍び込み、医薬品を盗む場面
も描かれていた。もちろん内部に協力者がいる
わけであるが、それも大場大尉が衛生隊であつ
たことと関連しているのだろう。映画では大場

大尉の所属や仕事内容まで描ききることは難しい。

一九四五年八月一五日にポツダム宣言を受諾し、日本は無条件降伏をするが、そのことを彼らは知らない。アメリカ軍はビラや拡声器を使って情報を伝えようとするが、なかなか彼らは信じない。収容所の日本人の協力を得て、写真などでミズーリ号甲板での降伏文書への調印などを見せることで、やっと終戦を事実として受けとめるが、降伏はしない。しかし、行動を共にしていた民間人は別であるということ、彼らの降伏を認め、山を下りさせる。

あくまでも自分たちは日本陸軍の兵士であるから、上官の命令がなければ降伏できないという一線をつらぬく。そして、一月二七日独立混成第九連隊長天羽少将の投降命令が届く。十二月一日、戦死した兵たちへ三発の弔銃を撃ち、「歩兵の本領」を歌いながら、大場大尉以下四七名が山を下りてくる。下で待ち受けていたアメリカ軍が、大場大尉から軍刀を受け取り、全兵が武装解除をすることによって戦闘は終る。



大場栄（投降後の
1945年12月撮影）

ウィキペディアより

あまり激しい戦闘場面はなく、看護婦と衛生兵の淡い想いや、取り残された乳児を救う場面などが挿入されていて、現代の若者にも受け入れやすいように脚色されていた。しかし、このサイパン島での戦いで、民間人約八〇〇〇人、日本軍兵士約三万人、アメリカ軍三五〇〇〇人の死者が出ていることは、テロップだけでは伝わりにくい。特に民間人の死者が多いことに、軍の宣伝などが影響しているところなど、わずかではあるが描かれてはいた。

（さなだのりこ）